

中間のまとめ

平成12年8月30日

杉並区教育委員会教育長
與川幸男様

杉並の教育を考える懇談会
会長 小林 登

当懇談会は、平成12年4月27日に設置され、教育長から「21世紀の杉並の教育のあるべき姿や方向性について」の意見を求められている。

懇談会は、当分の間、学校教育を中心に、「学校で子どもたちが生きるよるこびいっぱいになるには」をテーマとして、議論を重ねてきた。

懇談会としては、本年度末を目途に提言を行う予定であるが、今回の「中間のまとめ」は、これまで出された貴重な意見の中で、魅力ある学校づくりに向けて取り組む必要がある事項について、まとめたものである。

懇談会での議論の経過を十分参考にし、早期に実施に移せるよう今後の検討に生かしていただきたい。

(1) 学級運営の弾力化

学校生活において、子どもたちが「学ぶよるこびいっぱい」になるには、「授業が分かること」や「自分が認められること」などが欠かせない。

そのためには、少人数による学習機会の拡充や、カリキュラムにより学級編制を変えていくなどといった、子ども・地域・学校の実態に即した学級運営が必要である。

学級編制は、文部省の基準に基づき行われているが、非常勤教員制度やフレッシュ補助教員制度、ゲストティーチャーの活用などにより、校長が特色ある学級運営を弾力的に行えるようにすることが望ましい。

(2) 学校評議員制度の導入

子どもたちの健やかな体の成長と心の発達を担っていくためには、学校が、保護者や地域と連携・協力を図り、地域に開かれた学校づくりを推進する必要がある。

そのためには、学校自身が保護者や地域の意向を十分に把握し、学校運営に反映していく仕組みが欠かせない。これからの杉並の学校は、保護者

や地域に、より一層信頼される学校でなくてはならず、校長が学校運営に関し、第三者から意見や評価を求めると共に、説明責任を果たしていくシステムの構築が必要である。

こうした視点に立ち、各学校に学校評議員制度を導入し、学校の自主性・自律性の確立を図っていく必要がある。

(3) 地域の人材活用の推進

各学校では、これまで、地域の人材を活用した学習がなされているが、より一層の推進が必要であると思われる。

地域の人材活用は、学校の教育内容を多様なものにすることができ、また子どもたちが、教員以外の様々な人と接することにより、多様な人生観、勤労観、社会性などを身に付ける機会ともなる。

さらに、クラブ活動などの指導者として、様々な地域の人材が学校運営に参画することにより、子どもたちの生き生きとした学校生活が実現するものと考えられる。

学校教育に、杉並の各分野に優れた豊富な人材をバンクし、積極的に活用する制度づくりが必要である。

(4) 通学区域の弾力化

学校を活性化し、特色ある教育を展開しつつ、子どもたちにとって魅力のある学校づくりを進めていくためには、保護者や子どもたち本人の意思に関わらず通学区域により学校が指定されている仕組みから、保護者や子どもたち本人の意思が尊重される仕組みに変えていく必要性も考えられる。

現在、特別の理由がある場合、保護者の申し立てにより通学する学校を変更する指定校変更制度があるが、今後は、現行の制度を維持しつつ、子どもたちの通学したい学校の希望を聴く仕組みなどの検討に取り組む必要がある。

なお、弾力化については、学校と地域の連携の後退や学校格差などの問題も考えられるため、保護者等の理解を得ながら検討されることが必要である。

(5) 不登校への対応

全国的に見ても、杉並を見ても、不登校の子どもたちは増加傾向にある。

不登校の問題解決に当たっては、学校が全力を挙げて取り組むことがより重要である。しかし学校の対応のみでは限界もある。

すでに区では、さざんか教室や杉並スクールサポート、教育相談等によ

る対応が行われているが、これまでの取り組みに合わせて、学校という集団になじめない、引きこもりの子どものためのフリースクール等についても検討していく必要がある。